

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2018年度 助成者)

作成日 2018年 11月 13日

氏名 (フリガナ)	佐宗 加奈子 (サソウ カナコ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2018年10月7日(日)～ 10月13日(土)
所属機関名 身 分	聖隷浜松病院 手術室看護師

私は手術室で働き8年目になる。同じ職場で働いていると視野が狭くなっているのではないかと、中堅として今後のキャリアに悩んでいた。学会や研修に参加することで他施設の手術看護の話聞く機会が増え、少しずつ手術看護の視野が広がり、面白いと感じることが増えた。そのような時期に海外研修の話を受け、自分自身の看護の視野を拡大し、看護観を見つめ直すきっかけになるのではないかと、また今後のキャリアを考える上でも海外の看護を知ることは良い機会になると考え、聖隷浜松病院の海外研修に応募した。

アメリカでは尊厳死の考えが進んでおり、患者が自分自身で最期を考え意志決定できるようになっていた。当院でも脳死下臓器提供が行われているが、私は死に向かう人への看護を受け入れられず、臓器摘出術を担当する気持ちになれずにいた。しかし、自分の死についての考えを医療者と共有できることは、患者や家族にとって重要な意思決定による選択であり、その意志を尊重して関わりたいと思うようになった。

マグネットホスピタルでは、質の高い看護を提供するために医師を巻き込み、その部署の看護師全員で同じ目標へ向かい看護実践に取り組んでいた。プロビデンス・セントヴィンセント・メディカルセンター病院の手術室では、看護師・医師の双方で機材や診療材料を確認し、精査していくことで年間200万\$近く削減していた。当院でも機材や診材の調整は行っている。しかし、日々の看護実践を可視化し、結果をまとめ、多職種と共有し、常に患者や病院のためを考え、問題提起していることがアメリカとの違いだと感じた。

OHSU 附属ドーンベッカー小児病院では、チャイルドケアスペシャリストから話を聞くことができた。手作りの人形を用いて、なぜ手術や処置を受けなくてはならないのかを子供の五感に働きかけて患児の理解を得る関わりをしており、手術前は麻酔導入で使うマスクを渡していた。当院でも、術前に患児に会いに行き、マスクを渡して麻酔導入の流れを説明して関わっている。しかし、手術室到着時や麻酔導入時に泣いてしまう患児がいるのが現状である。小児の発達を理解し、手術や処置が必要なことを患児に理解してもらい関わりを学び、術前の関わりを考えていきたい。

研修中にリーダーシップの講義を受けた。リーダーとして必要なことは「対立のファシリテーター」になること、そのためには自分の意見を相手に主張することが重要で、自己開示し、対立を恐れず問題解決の方法を探すとより良い意見が出てくることを学んだ。私は平和的解決ばかりを模索してしまうが、問題解決のために、対立を恐れず自己開示し合える環境を作りたいと感じた。

ポートランド大学看護学部では、シミュレーション設備を見学した。患者シミュレーターを活用し、急変時の自分の行動を別室にいる他の学生と共有・分析し必要な判断や治療が行える訓練を行っており、卒業後は即戦力で働くことができる仕組みが整っていた。学生の時から鍛えられて教育されることで、急変時に冷静な判断が行えて、看護実践ができると知った。

今回の海外研修で、日本各地の看護師と知り合いになることができた。キャリアの異なる様々な看護師と経験を共有でき、とても刺激的だった。今回研修に参加したことで、取り組んでみたい点がいくつか見つかり、職場に還元していきたいと思った。